

学校を核とした地域創生  
～学校と地域の連携・協働の在り方と推進方策について～

協議の報告

平成 30 年 3 月

岩手県生涯学習審議会・岩手県社会教育委員会議

学校を核とした地域創生  
～学校と地域の連携・協働の在り方と推進方策について～

協議の報告

< 目 次 >

1	はじめに	3
2	学校と地域の連携・協働の必要性	4
3	それぞれの主体に期待されていること	4
	(1) 子ども	
	(2) 保護者	
	(3) 学 校	
	(4) 地 域	
	(5) 行 政	
4	連携・協働を進めるうえで留意すべきこと	9
	(1) 学校の過負担とならないこと	
	(2) 核となる人材を育成・配置すること	
	(3) 教育振興運動との関わりから	
	(4) 人口減少社会との関わりから	
	(5) 学校統合との関わりから	
5	協議の経過	12
6	委員名簿	13
7	資料【参考事例】	14

## 1 はじめに

- 現在、日本社会は急激な少子化・高齢化が進行しており、その動きは本県においても同様である。また、都市化と過疎化の進行、家族形態の変容、価値観やライフスタイルの多様化等を背景とした地域社会の支え合いの希薄化等によって、家庭や地域社会の教育の場としての機能の低下が指摘されている。

加えて、いじめを一因とする自死事案の発生や教職員の多忙化、子どもの貧困対策など、教育をめぐる様々な問題が顕在化してきている。

- 国においては、現在の日本社会が抱える困難や複雑化・困難化する学校の課題を克服し、地方創生及び教育改革を推進する観点から、学校と地域の連携・協働の必要性や在り方について様々な会議の場で議論されてきた。

平成 27 年 12 月の中央教育審議会答申においては、「地域と学校がパートナーとして、共に子どもたちを育て、共に地域を創る」ことが謳われ、文部科学省においてはこの答申を受け、平成 28 年 1 月に「次世代の学校・地域」創生プランを公表した。また、平成 29 年 3 月に示された新学習指導要領においては、学校と社会が目標を共有し連携する「社会に開かれた教育課程」の実現を重視することが明記された。

- このような動きを受けて、当岩手県生涯学習審議会及び岩手県社会教育委員会では、学校と地域が抱える諸課題の解決を図るためには、学校という場を核として学校と地域が相互に連携・協働し、子どもたちに地域への愛着や誇りを育み、地域の将来を担う人材の育成を図るとともに、地域住民のつながりを深め、自立した地域社会の基盤の構築・活性化を図る「学校を核とした地域創生」を進める必要があるとの認識の下で協議を進めてきた。

協議は、平成 28 年度から 2 か年にわたって行われ、計 4 回の意見交換を通して議論を深めた。学校と地域の連携・協働の在り方と推進方策について今後の検討の視点の一助となることを願い、このほど「協議の報告」としてまとめたものである。

- 当岩手県生涯学習審議会及び岩手県社会教育委員会としては、県内の各地域において、本報告を参考としながら、学校を核とした地域の創生を目指し、学校と地域との効果的な連携・協働の在り方が検討され、その推進が図られることを期待する。

## 2 学校と地域の連携・協働の必要性

- ア) 学校、地域が個々で様々な課題に向き合うのではなく、連携・協働して活動していく考え方が大切である。最近では地域のNPO等の活動が盛んになってきており、学校と連携・協働したいと考えている地域の人が多いと思われるが、実際には、なかなか学校に入っていけない現状がある。地域の人が学校と連携・協働し易くなるようなしくみづくりが必要である。
- イ) 学校統合により「おらほの学校」という地域の意識が薄れてくることが懸念される。そのような意味においても、学校区が変化する中であっても、学校と地域の連携・協働がさらに必要である。
- ウ) 少子化が進み、地域も元気がなくなっている。その地域の課題の解決に皆で連携・協働して取り組むことが必要である。障がいがある子どもへの支援ニーズも増えてきている。子どもたちの放課後の過ごし方について、地域の人に関わることによって、子どもたちの親は助かり、子どもは楽しみ、それが地域の元気にも繋がるという取組が求められている。

## 3 それぞれの主体に期待されていること

### (1) 子ども

- ア) 地域が求めているのは「児童生徒の輝き」であり「子どもの元気」である。特に高齢化が顕著な地域では、地域内に子どもたちの元気な声が響き渡ることもなくなっている。そのような地域では、児童生徒の生き生きした姿に触れて元気をもらうことで自分たちも「学校に対してできることをしていきたい」という思いを持つことができる。
- イ) 地域と学校の協働を具体化する際に、子どもが主体となって参画できる場をこれまで以上にどのように確保していくかということが大切である。少子高齢化が進み、将来の地域を担う人材も減ってくる中で、これからの世代に光を当てて育てていくことが重要である。子どもが主体となった取組の展開を期待する。
- ウ) 学校と地域団体及び事業所等との連携の中で、児童生徒が地域の活性化につながる取組に積極的に関わっている事例が県内にも多くある。一方で、それらの取組が他の地域で十分に認識されていない面もある。身近にある優れた取組に学び

ながら、子ども自身が自分たちには何ができるのかを考えることも重要である。

## (2) 保護者

ア) 多くの保護者は子育てのことや仕事のことによって精一杯という現状がある。家族の形も多様化しており、保護者が実の父母以外である場合もある。また、学校の行事に積極的に関わることができる保護者が特定の人に偏っている場合もある一方で、積極的に関わりたいと考えていても関われない保護者もいる。

我が子が在学中に学校や地域の取組に思うように関われない場合は、我が子が学校を卒業した後も学校に関心を持ち続け、自分に余裕ができてきた時に地域の一員として学校や地域の取組に関わるというように、長いスパンで考えていくことも必要となる。

イ) 保護者が参加すると子どもも一緒に参加するようになり、地域の活性化につながることから、保護者も地域の一員であるとの認識に立ち、地域の行事に積極的に参加することが必要である。

ウ) 保護者間の情報交換等により得た地域人材に関する情報を学校に提供し、保護者が学校と地域のパイプ役となることは可能である。また、保護者のコーディネーターにより、町内会組織等を活用しながら、保護者と教職員及び地域住民が一緒に語り合う場を持つことも有効である。

エ) それぞれの家庭の事情がある中で、できる人ができることをできるタイミングで行うということを基本的な考え方とすることが大切であり、一律に同様な関わり方を求めないことに留意する必要がある。一緒に行動できない場合は共感するだけでも関わったと見なすことも可能ではないか。直接的な行動ができなくても、家庭内で話題にしたり我が子に共感的に声を掛けたり励ましたりすることでも、学校や地域の取組に連携しているという考え方も必要である。直接的な行動に現れない連携もあるということ、その人なりの関わり方の形があるということを各主体が認識したうえで連携・協働の取組を進めていくことが重要である。

また、活動に必要な物資を提供するということが協働の一つの形であるとの考えに立ち、保護者は、学校や地域の求めに応じて、家庭で眠っている用具や物資を貸し出したり寄贈したりするなどの面から取組に関わることも可能である。

## (3) 学 校

- ア) 学校行事等に地域の方を招待するなど、地域に対して学校から窓口を開く取組が必要である。
- イ) 学校は子どもたちの輝きがあふれている。その輝きを地域へも提供することにより、地域も、その力を学校へ提供しようとするようになるのではないか。相互のつながりを持つために、学校側が自ら出ていき、地域とのつながりを持つことが必要である。教員からのアイデアを生かしながら発信の方法を工夫することも有効である。
- ウ) 学校外の人的・物的な資源を最大限に活用する中で新しい学びや教育が見えてくるのではないかとということが学校教育の中で話題になっている。学校の中で、地域の資源をどう活用するかという話し合いが必要である。
- エ) 子どもたちが学校から下校する時間帯に学区内の各ポイント地点に立って見守る活動に取り組んでいる地域の人の顔写真を校内に掲示している学校がある。このように地域の人の顔を見せることも大切である。
- オ) 学校から地域に向けて協力できることとしては、地域の行事がある際に子どもたちに参加を呼びかけることである。子どもたちには、地域の皆さんに感謝の気持ちを忘れないことと併せて、地域の取組に関わる意味や楽しさ等についても話をするのが大切である。
- カ) 学校と地域の連携を図るためには、校長のリーダーシップが不可欠である。校長自らが地域の人を知り、これまでの地域と学校とのつながりについての理解に努めることが大切である。また、地域の方から気軽にいつでも学校に話をしてもらえる雰囲気づくりに努めることや人事の変わり目に連携が途切れないように配慮することも必要である。
- キ) 良い結果をもたらす要因の一つに「よそ者」の視点がある。地元の人では地元の良さに気づきにくく根本的な問題がとらえにくい場合もある。地元の人と考えと「よそ者」の考えがうまくマッチすると良い。
- 学校の教員は転勤があり、「よそ者」である場合が多いことから、良い発想が期待される。しかし、地域との関わりで何かを行うとなれば、その多くが土日の取組になるため深く関わるのが難しい場合もある。よって、発想だけを出してもらい、あとは地域の状況に詳しい人がコーディネートしてイベントに結びつけたり、学校に負担にならない形で子どもたちが生き生きと活躍できる取組を進めた

りすれば、双方にとって有効な連携になると考えられる。

- ク) 地域の活動に子どもを参加させたい場合に学校が頼りにされると、学校側は負担に感じる場合が少なくない。本来、地域社会の中での体験や学びこそが子どものより良い成長には欠かせないものであり、学校の中だけで完結しないと認識することが必要である。そのうえで、『『地域のために』子どもを地域の活動に参加させる』という考え方ではなく、『『子ども自身のより良い学びと成長のために』子どもを地域の活動に参加させる』という考えに立てば、教職員の理解も進み、学校と地域の連携も進むのではないかと考えられる。

#### (4) 地 域

- ア) 地域には人材が豊富である。地域の中で、指導者に向いている人や際立つ特技をもつ人をつないでイベントを企画したり、学校に向けて（情報）発信したりすることも有効である。
- イ) 学校からの発信だけでなく、地域がどのような形で学校と結びつきたいのかということについて地域から発信することも大切である。
- ウ) 地域の中には、地域の子どもたちを地域の宝と考え、健全に育ててほしいという思いで活動している人・団体もある。そのような方々と連携・協働することにより、子どもたちは、地域の皆さんから温かく見守られていることを実感し、地域に愛着を感じ、それが地域の創生につながる。
- エ) 中学生のキャリア教育として、中学生が地域の中で社会体験学習を原則5日間行っている自治体がある。子どもたちが外に出て行って地域の方々に学ぶ。そして、地域の子どもたちを地域で育てるという取組である。この取組を実施するためには学校の先生方も大変だと思いが、先生方も地域に出て企業等と関わる必要があるとあり、地域も持てる力を子どもの教育のために発揮すべきである。地域との連携による中学生のキャリア教育の積極的な推進が必要である。そうすることによって、小学生のキャリア教育も地域との連携により工夫した取組が可能となる。
- オ) 地域の教育資源を活用するという観点からいえば、地域にある企業・事業者等と協力した取組が今後もさらに必要である。

- カ) 学校と地域の連携・協働した取組により、地域に伝わる食文化の伝承・普及と地産地消を推進することが可能である。

## (5) 行 政

- ア) 行政の施策として地域コーディネーターの配置及び資質向上に係る予算措置が必要である。これからもコーディネーターの配置に係る助成及び資質向上に資する研修を継続する必要がある。
- イ) 子どもたちが自由に参加して地域のボランティアの人と触れ合うことのできる放課後の居場所が増えることが大切である。
- ウ) 学校と地域の関係は密接にならざるを得ない状況である。施設との兼ね合いもあるが、校内に公共図書館を作って、そこに地域の集会所も作ったという関東地方のある学校のように、小中一貫教育との流れとも併せて、各自治体にあっては、柔軟な発想により効果的な取組を展開していくことが望まれている。
- エ) 連携といっても具体性がなければ地域の人にとっては分かりにくい。行政から地域に対して連携する取組の例や具体的な構想を示すことも必要である。

## 4 連携・協働を進めるうえで留意すべきこと

### (1) 学校の過負担とならないこと

- ア) 学校では、引率等の責任が伴うものは教員が対応することとなるため、地域と関わる活動については結果的に教員を巻き込まない活動はできないものが多い。地域から様々な提案がなされる場合でも、そのことが学校の過負担とならないように工夫することが大切である。
- イ) 学校を核とすると、結果的に学校が担う役割が増えるのではないか。「学校を核とした地域創生」というと地域が学校化されていくイメージも湧いてくる。  
学校だけでなく、地域にも既存の学べる空間が多くあり、必ずしも学校に来てもらわなくても地域内のいろいろな空間で学ぶことはできる。学校や既存の学習場所だけに集約するのではなく、地域内にある学べる場所をつないでいくという考え方も必要である。



## (2) 核となる人材を育成・配置すること

- ア) 学校と地域のどちらにもメリットがあるようなマッチングを期待するには、それにふさわしい力量をもつ人材が必要であり、そのことが、学校の負担軽減や連携の充実につながる。
- イ) コーディネーターの中には、地域人材のを見つけ方や交渉の仕方に課題を感じている人が多く、校長や副校長への提案の仕方などに神経を使っている人もいる。コーディネーター同士の情報交換は、それらの課題の解決に有効であり、特に新しくコーディネーターになった人にとっては非常に重要な取組である。
- ウ) 市民センターや地域の協働体が学校と地域をコーディネートできる体制が取れば、コーディネーターは、地域のことは分からなくても、雇用されてから地域の理解を深めていくということでも良い。地域を知っている人でなければできないということになると配置は進まない。非常勤でもよいので、まず雇用し、積極的に地域に入ってもらうことが大切である。
- エ) コーディネーターはコーディネート力を身につけてからでなければだめということではなく、経験を積み重ねながら力を蓄えていくという考え方も必要である。成果をあげなければならないということになるとコーディネーターの負担が増えることになる。成果をあげることを求められるから人材を養成してから実践しなければならないということになる。やること自体に意味があるという評価規準で考えると、どんな人が配置されても経験しながら育っていくことができる。
- オ) 学校と地域の連携やコーディネートについても、やるからにはエビデンス（証拠、根拠）を求めるといようなことではなく、素朴な形でも良いので、その人なりの取組を実践し、関係者が良いと思えるような評価規準を作って活動が進められることが大切である。

## (3) 教育振興運動との関わりから

- ア) 教育振興運動は県内各地で実践されている。これを解消していくのか。やめて新しい活動を作っていくのか。それとも、これを基軸としてやっていこうとしているのか。目指す方向性を明確に分かりやすく提示する必要がある。
- イ) 地域によって教育振興運動でもコミュニティ・スクールでも、どちらを選択し

でも良いということではなく、岩手の教育振興運動をしっかりと充実させたいうえで、文部科学省の進めているコミュニティ・スクールへの移行にはこういうものが必要であるということを示していく必要がある。

- ウ) 現状においては、県内の自治体では、いわて型コミュニティ・スクールに継続して取り組むという考えの市町村が多いと聞いている。「学校と地域が連携・協働しているいろいろな取組をやっていきましょう」ということがポイントなのだから、それを前面に立てることが大切である。理屈付けの部分で整合性を図ろうとするのではなく、大きなところを示すことが大切である。

#### (4) 人口減少社会との関わりから

- ア) 地域と一口にいても漠然としており、大きさや人数など、人により地域という言葉に対して持つイメージは多様である。それぞれの人が抱く地域に対する様々なイメージを上手くすり合わせ、且つ学校を軸としながら地域づくりを行っていく取組について考えていくことが大切である。
- イ) 高等教育もオンラインで受けられるようになっている。これまでの「学校」という概念自体を変えていく必要がある。「学校を核」というよりも「学校自体を変える」というような方向で考えることも必要である。
- ウ) 地域の高齢化は確実に進んでおり避けられない課題である。そのような中で、どのように学校と地域が連携・協働していくかということについて、20年先、30年先を見据えながら、各主体ができることを具体的に考え、実行していくことが重要である。

#### (5) 学校統合との関わりから

- ア) 学校統廃合により学校数が加速度的に減少している中で、学校を核とした地域の創生がどこまで両立できるのか。加えて、教員は総数が減る一方で高齢化も進んでいく。地域も学校もこれから縮小していくという前提の中で、地域創生により具現化される地域の状況をどこまで豊かにしていくのかということが重要な課題である。
- イ) 学校統合によりスクールバスで通わなければならない小中学生の多い地域にとっては、学校を核とした地域創生の取組は、地域意識が薄まるなど、これまでの

方法では難しいことが想定されるため、地域のニーズを十分に把握しつつ、学校と地域の両方にメリットがあるように取組を進める必要がある。その際、学区が広域的な範囲になったことのデメリットよりもメリットに着目し、それを積極的に活用する発想が重要である。

## 5 協議の経過

### ○第1回の協議

日 時：平成28年7月20日（水）13：30～16：00

会 場：岩手県民会館 4階 第2会議室

### ○第2回の協議

日 時：平成29年2月1日（水）13：30～16：00

会 場：盛岡地区合同庁舎 8階 大会議室

### ○第3回の協議

日 時：平成29年7月19日（水）13：30～16：10

会 場：盛岡地区合同庁舎 8階 大会議室

### ○第4回の協議

日 時：平成30年1月30日（火）13：30～16：00

会 場：盛岡地区合同庁舎 8階 大会議室

## 6 委員名簿（役職等：平成 29 年度時）

- 大 橋 清 司 （岩手県社会教育連絡協議会 会長）
- 金 谷 茂 （一般社団法人岩手県 P T A 連合会 顧問）
- 熊 谷 拓 也 （岩手県立盛岡第二高等学校 校長）
- 小 菅 正 晴 （一関市教育委員会 教育長）
- 清 水 利 幸 （岩手県立盛岡となん支援学校 校長）
- 瀬 川 愛 子 （特定非営利活動法人岩手県地域婦人団体協議会 会長）
- 高 橋 聡 （岩手県立大学社会福祉学部 教授）
- 田 口 博 子 （岩手県弦楽研究会 会員）
- 恒 川 かおり （特定非営利活動法人未来図書館 主任コーディネーター）
- 西 里 真 澄 （岩手看護短期大学専攻科助産学専攻 講師）
- 西 舘 敦 （いちのへサンビレッジクラブ 代表）
- 細 川 恵 子 （特定非営利活動法人紫波さぷり 理事長）
- 松 田 恵美子 （岩手県青年団体協議会 会長）
- 村 中 ゆり子 （盛岡市立杜陵小学校 校長）
- 室 井 麗 子 （岩手大学教育学部 准教授）

（五十音順：敬称略）

## 7 資料【参考事例】

### (1) 一関市立藤沢中学校と藤沢住民自治協議会の取組

「中学生の声をまちづくりに」

(平成 29 年度一関市キャリア教育シンポジウム発表資料から)

### (2) 岩手県立黒沢尻北高等学校と NPO 法人いわて NPO-NET サポートの取組

「きたかみ世界塾」

(平成 29 年度岩手県生涯学習推進研究発表会事例発表資料から)

## 中学生の声をまちづくりに

～藤沢町住民自治協議会「次世代プロジェクト事業」を通して～

一関市立藤沢中学校 校長 鈴木 秀行

### 1 はじめに

県内の小中学校では、「いわて型コミュニティ・スクール構想」のもと、学校・家庭・地域が連携、協働する教育が推進されています。また、校長としても、教育を学校という枠に囲い込むのではなく、地域の資源や教育力を活用して、生徒の健全育成を図っていくことが大切であると考えていたところでした。

平成27年12月に藤沢町住民自治協議会（以下、住民自治協）が、藤沢市民センターの指定管理者の指定を受け（市内第1号）、地域住民一体となった、より身近な地域づくり、人づくりの中心となって活動を組織していくことになりました。そのような折、住民自治協の星義弘事務局長が来校され、「これからの町づくりを考えていくときに、次代を担う中学生の柔らかな発想に期待するところが大きい。」とのお話を受け、まずは要請のあった住民自治協の愛称とシンボルマークのデザイン、地域を元気にするアイデアの募集に全校で参加することとしました。

さらに、平成28年度には、星事務局長より市補助「次世代育成事業」を活用した「次世代プロジェクト事業」への参加を打診され、職員会議で校長として協力に応じたい旨を提案し、職員はノータッチ、窓口は校長での活動として了承され、「次世代プロジェクト事業」への参加となりました。

#### 4、校長私見「協力したい！」

＜職員会議資料（一部抜粋）から＞

- 一関市で最も早く、市民センターの指定管理者になった藤沢町住民自治協議会の活動を後押ししたい。（まちぐるみでの取り組みに広げたい。）
- 「地域を支え、地域に支えられる学校」の実現
- 生徒の教育は、学校に囲い込んで教師のみが行うものではない。  
「教師でもない、家族でもない」大人の教育力により子どもを成長させたい。
- これからの地域の担い手としての自覚を促し、将来の地域づくりの疑似体験をさせたい。
- 藤中生の活躍の場、元気の発信

### 2 実践の流れ

#### (1) 平成27年度（3学期）

- ・住民自治協の「愛称」と「シンボルマークのデザイン」、「地域を元気にするアイデア」への応募

#### (2) 平成28年度 「次世代プロジェクト事業」への参加

- ア 「地域を元気にするアイデア」の全校アンケートの実施、メンバー募集
- イ 「まちづくりのアイデア」ワークショップの開催
- ウ 「指定管理記念講演会」での発表
- エ アイデアを具現化する活動（「地元食材を使ったパン」の製作）
- オ 「地域フォーラム」会場でのパンの販売活動
- カ 活動のまとめ



### 3 具体的な取り組み

(1) 住民自治協の「愛称」と「シンボルマークのデザイン」、「地域を元気にするアイデア」への応募

【シンボルマーク】 優秀賞1名、入選3名

【愛称】 最優秀賞 2年男子「どんとこい藤沢」 優秀賞1名、入選2名

＜審査員評＞「地域づくりへの強い期待と思い、そして、何事にも前向きにとらえ進んでいくことと併せ藤沢に『どんと』人が来るようにとの発信性がある」

【地域を元気にするアイデア】 校内で集約したもの

(2) 「次世代プロジェクト事業」始動

ア 「地域を元気にするアイデア」の全校アンケート（パート2）の実施、メンバー募集

○3年生5人が応募、その後、3年生、2年生が1人ずつ参加

イ 「まちづくりのアイデア」ワークショップの開催

○中総体後から、放課後に、学校で

○支援する人・・・協議会スタッフ、NPO 一関市民活動センター「地域支援員」

○中総体後の6月に2回開催

ウ 「指定管理記念講演会」発表スライドの作成 ・放課後（PC室）、自主的に

(3) 「指定管理記念講演会」での発表 <H28/7/9(土)>

○講師；増田寛也氏（前岩手県知事、元総務大臣）の前座を務める。→ 勝部修市長に

○ワークショップで話し合った内容をプレゼン。15分程度

・千田会長から「胸を熱くして聴かせてもらった。大人の停滞を中学生の発想で打破していきたい。今日の発表は住民による地域づくりの第1ステップだ。『夢の実現』『誇れる藤沢をつくること』を心に誓った。」と講評がありました。

(4) アイデアを具現化する活動（「地元食材を使ったパン」の製作）

○住民自治協「お金も、モノも、手も貸します」

○アイデアの中から「地元食材を使ったパン」を選定

○町内の「パンのいとう屋」さんの協力のもと、藤沢の地元産品「リンゴ」等を使用したオリジナルパンを考案、製作

・「りんごだっちゃん」、「もちりふすべパン」の2種類

（文化祭後；10月～12月にかけて3回）



▲「パンのいとう屋」さんご夫妻と相談する次世代PR7メンバー

(5) 「地域づくりフォーラム」会場でのパンの販売

ア 販売に向けたPR活動（ビラ、ポスター、手紙・ラジオ、告知端末）

イ 2/5(日)、パン販売（縄文ホール；フォーラム終了後）

・製作したパンは、250個限定で販売。10分で完売。

ウ 収益金 ・「PR7」の名入りスリッパ30足を学校に寄贈



← 販売開始直前  
どきどきのメンバー達

(6) 全校生徒への活動報告会 3/14(月)

○「全校生徒に活動の報告をしていない。やりたい。時間をくれ。次の世代に繋がりたい。」

○メンバー達は、受験後の数日で、あっという間にプレゼン資料を作成し、全校生徒に報告。

(7) 「一関の未来予想図トークショー」へ藤沢町代表として出演依頼 11/26(土) (Uドーム；2名)



4 「次世代プロジェクト」参加生徒への事後のアンケート結果 (N = 6 人、ABCDEF で表示)

- (1) 活動に参加してよかったですか。 「とてもよかった」 6人  
 (2) それはどうしてですか。

ABE 活動を通して、地域の、町のよいところをたくさん知ることができた。  
 CD 自分たちで地域に貢献することができた。  
 F 自分たちが考えたパンを売った時にお客さんが喜んで買ってくれうれしかったし、中学生が地域のために頑張っているということが少しでも伝えられた。  
 A 悪いところを改善する働きができたから。  
 B パンを考えたりするのがとても楽しかったから。



← 笑顔が広がるワークショップ

- (3) 活動時期、活動時間はどうでしたか。

ア 活動時期 (6月; ワークショップ、7月; プレゼン発表、11月~; オリジナルパン考案・販売、3月; 報告会)

C ちょうどよかった。  
 A もう少し時間がほしかった。  
 B 部活動もあってなかなか参加できなかった。  
 D 中総体の関係で6月は少しずらした方がいい。5月の始めがいいと思う。  
 E 6, 7月は中総体の関係で参加できない人がいたから忙しくない時に行った方がよい。  
 F 僕は途中からでしたが、パン考案から販売に向けて考えることができた。

イ 活動時間 (活動時間がとれる日の放課後)

ABCDE ちょうどよかった。(前もって日程をしっかりと確認した方がよい。集まれる人から集まって話し合いを進めた。それ以外は取れない。)  
 F リーダーを中心に今日のゴールを決め、時間を有効に使って午後6時前後まで活動できた。

- (4) 今年度の活動内容について、感想や意見ををお願いします。

AB 地域についてたくさん知ることができてよかった。  
 A 授業で習ったことを使うので楽しかった。  
 C 地域を活性化して一緒に仲間と活動することでいい思い出になった。  
 B 自分の要望が実現するのが嬉しかった。  
 D 活動がとても充実していたと思う。自分たちの出した意見が実際に活動になった時が一番楽しかった。もっとこのような活動が増えるとよい。  
 E 2年生のメンバーが少ない。次世代なので多くの学年に参加してほしかった。地元のパン屋とコラボし自分たちで考えたことが実現できて嬉しかった。  
 F 6月から活動が始まりワークショップ、プレゼン、パン考案・販売、報告会をしました。3年生とパンを考え販売当日にはわずか 10 分で完売させることができ、嬉しかったです。



△ 「藤沢町の誇れるものは次世代プロジェクトです！」

- (5) 「次世代プロジェクト」の活動のよさは何でしたか。

A 意見を出し合ってより良いものをつくり上げること  
 B 藤沢のよいところを知ることができたこと  
 C みんなでないとできないことができる点  
 D ワークショップで出し合ったことを実際に自分たちで活動できること  
 E 自分たちで考えたことが実現できたこと、住民自治協議会の方々がとても協力的だったこと  
 F 地域の方々に中学生の頑張りを伝えることができたこと

(6) 活動を通してあなたにどのような資質、能力が身に付いた(育まれた)と思いますか。

- A 先を見通してまとめる力
- B 人を思いやる力
- C 創造する力
- D 他人のことを考えて行動すること。地域に貢献しようとする意欲が育まれたこと
- E 買ってもらうためにどのような生地や具が必要か、パンの値段をいくりにするかを考えたこと
- E 将来のことを見据えて活動していく力
- F みんなと協力して一つのものを創り上げる力

(7) 藤沢町住民自治協議会の支援体制はどうでしたか。

- A よかった。自分たちが言ったことをしっかりフォローして下さった。
- B とてもよかった。自分達がやりたいと言ったことを叶えてくれて私達のために走り回ってくれた。
- C 最高だった。何でもしてくれてよかった。
- D とてもよかったと思う。自治会のお陰でスムーズに進めることができた。
- E とても協力的だった。言った意見をすべて受け入れてくれた。
- F 中学生が参加できる場を提供して下さった。パンの宣伝などでラジオでの放送も手伝って下さった。

(8) 町づくりに中学生の声は必要ですか。また、その声は活かされると思いますか。

- ABCD 必要であるし、活かされると思う。
- E もちろん。パン販売の時多くの人買いに来てくれたから。7月の発表も多くの人に聞いてもらえたから。
- F 次の世代を担う子供の声を積極的に取り入れることはこれからの町づくりに必要だと思います。

(9) 次年度以降の活動について、自由に意見をお願いします。

- A ネットを使った活動。発信。
- B 人をもっと増やして小学生の意見をとってほしい。
- C もっと藤沢を盛り上げてほしい。
- D 来年度はもっとこのプロジェクトに参加してほしい。
- E 今年度出した改善点に関する活動を行ってほしい。次の2年生からも3人ほどは活動に参加してほしい。
- F 野焼きの改善や館ヶ森ウィナーを使ったギネス記録など新しいメンバーと考えていきたいです。

## 5 平成29年度「次世代プロジェクト2017」

(1) 「『藤沢町のお宝』発見&発掘!!」の全校アンケートの実施、第2期メンバー募集

3年生6人・2年生1人が希望(チーム名「プロジェクト7」)

(2) 岩手県立大学(佐藤哲郎研究室)とコラボした「まちづくりのアイデア」ワークショップの開催

(中総体後; 6月から12月にかけて5回)

(3) アイデアを具現化する活動（地元産品のリンゴを使った「アップルパイ料理教室」の開催）

○自分達で試作会 12月 ○PR(チラシ、告知端末)

○本番 1/13(土) (町民 17名参加)

(4) 「地域づくりフォーラム」での実践発表 2/4(日)予定



← 県立大学生とコラボの  
ワークショップ

## 6 成果と課題

### (1) 成果

#### ア 中学生の秘めたる力を実感

- ・場を与えると発想が広がり、大人の支援の下で実際に形にしていくストーリーを目の前で見ることができた。中学生恐るべし。

#### イ 「現実の問題集」を解く時間

- ・「どうやってPRするの?」「クルミにアレルギー反応を示す人もいるけど」「値付け」等々

#### ウ 信頼できる大人たちが地域にいることを実感

- ・自分達を見守り、声をかけ、励まし、助言してくれ、お金もある程度出してくれる大人が地域にいっぱいいる。

#### エ 企画を現実化できる手応え

- ・生徒の事後アンケートにもあるように生徒自身が手応えを感じている。

#### オ 「社会人としての基礎となる力」は自然と育まれる

- ・活動する中で様々な力が身に付き、見方・考え方が豊かになり、意欲、自信に繋がった。

### (2) 課題

#### ア 活動時間の確保

- ・中学生は部活動、行事、テストで忙しい。時間を見つけてやるのが活動のポイント。

#### イ 住民自治協と学校との連携の在り方

- ・意見交換しながら継続可能な活動の在り方を共に探っていくこと。

## なぜ「きたかみ世界塾」が必要なのか？

岩手県立黒沢尻北高等学校 副校長 千葉 治  
いわてNPO-NETサポート 事務局長 菊池 広人

### <きたかみ世界塾とは>

- ・きたかみ世界塾とは、地域をフィールドに、課題解決力・価値生産力を高め、将来自分が探究したいこと、生み出したいことを明らかにする学修です。
- つまり、「自己実現」する力を高めることが一番の目的。

### <きたかみ世界塾の視点・課題設定能力・課題解決能力>

- ・地域の現状と目指すべき未来の間にある「ギャップ」

「目指すべき未来は \_\_\_\_\_ であるが、  
\_\_\_\_\_ このままだと \_\_\_\_\_ となってしまう」

※現状の「問題」をとらえるのではなく、目指すべき未来を考えることで「課題」となる。

※自分のみが「目指すべき」と思うのではなく、他の人からも共感されることで「地域の課題」となる。

※全員が「目指すべき」と思わなくても、具体的・論理的であれば、その考えは共感される。

### <1年生のプログラム>

- ・チームで設定した地域の課題の「仮説」を検証する
- ・仮説を元に地域の課題を解決する「アクション」を実践

### <2年生のプログラム>

- ・社会について深く理解した上で、果たすべき使命の自覚と個性に応じた進路決定のために「自ら探求したいこと」を深めること
- 1年を通して探求する（オープンキャンパス・市内でのフィールドワーク（夏休み・冬休み・他））
- ・その中できたかみ世界塾では「地域」をフィールドに自ら「知」を生み出してみる
- この経験を活かし、最終的には下記を具体的かつ明確に説明する。
  - ①一緒に探究したい大学教員・研究者（大学・学部・学科・教員名）を1人見つけ
  - ②どのようなことを探求したいのか
  - ③なぜ、その大学教員・研究者と探究したいのか（他の同じテーマの研究者と何が違うのか）
  - ④私が探究することで、社会・地域にどのような価値を生み出せるか（具体的に）

※「自分が入れるところ」ではなく、「自分が学びたいこと」を明確にすることで、「学ぶ目的意識」を高め、学力の向上にもつながる。

【参考】学びたい方向性を「文系」「理系」のほかに、「探究」と「目的」で整理する。

『探究志向』 → 理学 倫理学 芸術 哲学 生理学

『目的志向』 → 工学 法学 デザイン 文学 医学

⇒学部・学科よりも、大学の教員によって、どちらの志向の探求が行われているかが異なる。  
だからこそ「何を学べるか」を具体的に知る必要がある。

### <きたかみ世界塾が必要な背景>

『2010年に「ニーズの高い仕事トップ10」は、2004年には存在しなかった業界』  
（イギリス・エクセター大学学長 スティーブ・スミス）

『技術革新の結果、今後10～20年程度で、アメリカの総雇用者の47%の仕事が自動化されるリスクが高い』  
（イギリス・オックスフォード大 マイケル・A・オズボーン）

『2011年度にアメリカで入学した小学生の65%は、大学卒業時には、いまは存在しない職に就く』  
（アメリカ・ニューヨーク市立大 キャシー・デビッドソン）

○社会の変化・情報化社会と学び方の変化

これまで		これから
遅い	知識伝播	速い
遅い	知識の価値低下	早い
大きい	都市の優位性	小さい
持っている知識	自分の資産	知識を生み出す力
学生の時だけ	学習時期	ずっと
依存・受け身/丸暗記	成功するスタイル	自立・能動
先生	学ぶパートナー	多様な人
壁が必要	社会と学校	つながる必要
所属を得る 所得を守る	学ぶ目的	自分らしい生き方・夢の実現

これまでの「様々な境界を確保し、所属と物質で自分らしさを維持する社会」から、  
**これからの「自分でひろがり、自立的に価値を生み出し、自分らしい生き方を実現する社会」へ**

○各年代で到達点とは～教育基本法より

- 中学校までの義務教育  
 自立的に生きる基礎⇒生きていける力を身に着ける
- 高校  
 社会に貢献できる力を身に着ける
  - ・豊かな人間性、創造性
  - ・社会について広く深い理解と健全な批判力
  - ・そのうえで、果たさなければならない使命の自覚と個性に応じた進路決定
- 大学  
 新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供
  - ・高い教養と専門的能力を培い、深く真理を探究
 (参考) 大学入学希望者評価テスト (仮称)
  - ①教科・科目の十分な知識
  - ②問題を発見・定義し情報を統合、構造化し解決に向けて主体的に思考判断する力
  - ③プロセスや結果を表現する力
 →今年の中学校3年生の代の大学入試から導入  
 (参考) 大学では学士認定が非常に厳しくなっている。2単位あたり90時間の学修が必要

<最後に 働き方・働く意義・企業の価値も変わってきている>

これまで		これから
資本・実績	会社・組織の価値	価値を生み出す力
大きい	組織安定性	小さい
大きい	雇用安定性	小さい
指示どおり	求められる働き方	自分が生み出す
同一組織内・関連組織	仕事の仲間	多様性が必須
知識・経験・お金	自分の資産	価値を生む力・つながる力
他人よりよいもの	憧れのライフスタイル	自分らしさ
質がよいもの 安いもの	顧客の志向	共感できるもの (自分・社会に共鳴するもの)

## きたかみ世界塾 2017 年実施概要

### 〈きたかみ世界塾の目的〉

きたかみ世界塾は、主体的に地域課題をとらえ、それを解決するためのアクションを考え、実行することで、社会、世界を「ジブンゴト」としてとらえ、自ら学び・行動する人材を育てることを目的とする。

	1 年生	2 年生
各学年の到達点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>仮説設定に基づく論理的思考力の向上</b> 自分で仮説を設定し、その仮説を実際の社会の中で検証し、その検証結果に基づいて、アクションを実施するという一連の流れの中で、論理的な思考法を学ぶ。</li> <li>・ <b>現実の地域社会とのつながりを学ぶ</b> 地域の「リアルな」課題をふれ、その中で高校生の自分ができるアプローチを検討することで、地域と自分の「大人」としての関係性を構築するとともに、未来に向けての自分と北上とのつながりかたを学ぶ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>地域・社会をフィールドにして、自分が将来探究したいことを具体化・深化させる</b> 探究したい学問、技術、テーマが現実社会においてどのような関連性があるか、そこにはどのような背景があるかを理解するとともにどうすれば探究できるかを考える。</li> <li>・ <b>地域課題解決に向けた実践力を高める</b> 地域を構成する 1 人として、地域課題を主体的にとらえ、課題を明確化し、その中で自分の考えを整理し、解決に向けたアプローチを行うことができる論理的思考力を高める。</li> </ul>
実施体制	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>ファシリテーター</b>：黒沢尻北高校教員（担任・副担任） ひとつづくりのプロとして生徒自身の主体的な検討を促進させる役目</li> <li>・ <b>メンター</b>： 北上市職員 北上市社会福祉協議会職員 各クラス 3～4 名 全 15 回中 6 回程度の参加</li> </ul>	なし
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>コーディネーター</b>：東北学院大学・いわて N P O - N E T サポート 生徒が主体的に学ぶためのプログラム作成、ファシリテーター、メンターのサポート</li> </ul>	
フィールドワーク 夏休み等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>チームで設定した「仮説」を検証する</b> ワークショップで設定した仮説「本来は○○○であるべきだが、実際は○○○である」が、実際にそうであるかを自分たちが考える方法で実際の現場に行き、調べてくる。 また、その中で高校生の私達が、その課題を解決するためにできないかどうかを探してくる。</li> <li>・ <b>仮説を元に地域の課題を解決するアクションを実践</b> これまで検討した仮説をもとに、高校生の私達だからできるアクションを実践する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>地域・社会をフィールドに、自分が探究したいことを深める</b> オープンキャンパスでの大学教員との交流や、きたかみ未来会議等の市内の取り組み、個人活動等で 1 人以上、自分が将来探究したいことに近いテーマの大人と議論する場をつくる。</li> <li>・ <b>黒陵祭で地域の課題を解決する</b> 1 年生での実践の経験をさらに精度を高め、地域の課題を解決する取り組みをクラスで 2～3 プロジェクト実施する。（課題解決の結果報告でもよい）</li> </ul>

〈きたかみ世界塾スケジュール〉 ※○がついているところがメンター配置

回	1年生		2年生	
1	5/12	「北上市の課題とは」 ・「北上市」の現状の課題を共有する ・課題設定に向けた考え方の整理 ⇒最終的に自分が今後取り組みたいテーマを決められるようにする	5/12	「自分の学びたいことは…」 ・2年生の世界塾の学び方の共有 ・1年生と2年生の学び方の違い・関係性、これからの意図共有 ・夏休みの探求に関するインプット
2	5/19 ○	仮説検証・アクションの流れの共有 ・仮説となる課題の設定方法を学ぶ ・課題へのアプローチ方法を検討する	5/19	【黒陵祭】地域の課題を解決するアクションを考える ・地域の課題の仮説設定・企画作成
3	6/9 ○	フィールドワーク行動計画策定 ・夏休みの行動計画の策定・役割分担を確定させる ⇒夏休み中のアクションに関する宿題設定	6/9	【黒陵祭】地域の課題企画コンペ ・クラス内で企画コンペを実施 ・クラスで2～3案を選定し、チーム分けまで実施
4	6/30	講演会 「地域から世界へ～これからの地域の可能性～」 講師：高橋博之氏	6/30	講演会 「地域から世界へ～これからの地域の可能性～」 講師：高橋博之氏
5	7/14 ○	夏休みのアクションの確定 ・チームごとに仮説を検証するために必要な取り組み、およびスケジュールを確定させる	7/14	夏休みの探求に関する状況報告作成 ・それぞれが、仮説を持って、誰に何を聞くためにどのようなアクションを実施するかをまとめ、共有する
6	8/18	黒陵祭での発表準備 ・夏休みでの検証報告の作成	8/18	【黒陵祭】黒陵祭準備 ・地域の課題を解決するためのアクションの準備・最終確認
7	9/1 ○	夏休みの学びのふりかえり ・夏休みの課題を共有し、その中で学びえたことをクラス内で共有する	9/1	【黒陵祭】アクションふりかえり ・黒陵祭での地域の課題を解決するアクションが実際に課題の解決につながったかをふりかえる
8	9/15	【講演会】高校生における課題解決の実践 高校生でのアクションのひろがり共有できる講演会の実施	9/15	夏休みの学びのふりかえり ・夏休みの課題を共有し、その中で学びえたことをクラス内で共有する
9	9/29 ○	「アクション検討会議」 ・これまでの学びをもとに「地域の課題」を再設定し、アクション案を検討する	9/29	「学びたいことを考える」※黒陵会館 ・これまでの学びをもとに「自分が学びたいことを具体化することを共有する」
10	10/6 ○	アクション案の具体化 ・アクションをいつ、どこで、どのように行うかを確定させる⇒その後、必要に応じて、事務局やメンターと連絡を取り合う	12/8	「学びたいことを具体化する」 学年全体で実施。自分が探究したいことを構造化し、整理する
11	12/1	中間発表会 クラス内で、実践状況に関する中間発表会を行う⇒次のステップも意識させる	1/19	クラス内発表会 ・冬休みの課題をクラス内で共有する
12	1/19	発表会準備 ・冬休みでの実践の図式化 ⇒必要に応じて情報の時間との連携によるPPT作成	2/2	【講演会】これからの学びを考える講座 これからの学びの幅を広げる講演会を実施
13	2/2	クラス内発表会 ・クラス内での発表会 ・優秀作品は全体発表会へ	2/9	ふりかえり ・これまでの学びのふりかえり ・全体での視点共有
14	2/9	ふりかえり ・これまでの学びのふりかえり ・全体での視点共有		
15	2/23	地域の皆さん、協力していただいた皆さんを巻き込んだ全体発表会の実施		